

南イタリア都市の居住空間

—アマルフィ、レッチェ、シャッカ、サルデーニャ—

陣内 秀信編

Living Places in Southern Italian Cities

Amalfi, Lecce, Scaicca and Sardegna

Hidenobu JINNAI



アマルフィ



レッチェ



サルデーニャ



シャッカ

和文・英文併記
Bilingual Edition

CHUO-KORON BIJUTU SHUPPAN

中央公論美術出版

南イタリア都市の居住空間———目次

序論 南イタリアの都市と住宅の特質

第Ⅰ部 アマルフィ

序章 アマルフィ研究の視点

第1章 アマルフィの全体像

- (1) アマルフィの歴史と風土
- (2) アマルフィを構成する五つのエリア
- (3) 街路から見る都市構造

第2章 各地区を語る

- (1) 海岸線とボルタ・デッラ・マリーナ
- (2) ドウオモ広場とフェッラーリ広場
- (3) 海岸沿い斜面の住宅群
- (4) メインストリート沿いの空間
- (5) 斜面の住宅群
- (6) 工場跡地の空間

第3章 アマルフィの発展段階を読む

- (1) 住宅までのアプローチと建物の積層メカニズム
- (2) 眺望から分析するアマルフィの都市構造
- (3) アマルフィの現在
- (4) 住宅のタイポロジー

第Ⅱ部 レッチェ

序章 レッチェ研究の視点

第1章 都市の形成過程とその空間構造

- (1) レッチェの起源
- (2) ローマ計画都市の変容
- (3) ノルマン人とスワビア人の時代
- (4) スペインによる支配と都市改革
- (5) 新しい宗教都市の誕生
- (6) オーストリアの支配とブルボン家の復興
- (7) フランス支配から現代へ

第2章 外部空間の形態と意味

- (1) 街路のヒエラルキー
- (2) 広場のカテゴリー
- (3) 外部空間に点在する聖所

第3章 バロックの空間演出

- (1) 教会への劇的なアプローチ
- (2) 街路景観を生む建築装飾

第4章 住宅の構成

- (1) 南イタリアの風土が生んだレッチェの住宅
- (2) 住宅のタイポロジー

第5章 地区の空間構造と住宅事例

- (1) ジーラヴォルテ地区
- (2) レ・スカルツェ地区
- (3) イル・バンビーノ地区
- (4) アルコ・ディ・プラト地区
- (5) キエーザ・グレーカ地区
- (6) サンタントニオ・ディ・デントロ地区

第Ⅲ部 シャッカ

序章 シャッカ研究の視点

第1章 シャッカの都市形成

- (1) 起源
- (2) ローマ期
- (3) アラブ期
- (4) ノルマン期
- (5) アラゴン期
- (6) 都市システムの変換期
- (7) イタリア統一後

第2章 コルティーレの形態と意味

- (1) アラブの生み落とした迷宮空間
- (2) 南イタリア的な袋小路
- (3) 空間分節の装置
- (4) セミ・プライベートな空間
- (5) コルティーレのタイポロジー

第3章 住宅のタイポロジー

- (1) モニュメンタルなパラッツォ
- (2) パラッツォの空間構成
- (3) グロッタの系譜
- (4) 庶民住宅のタイポロジー
- (5) 構造体の外に増殖するメカニズム
- (6) 都市のコンテクストによるヴァリエーション
- (7) 上方への展開
- (8) 2階建ての系譜
- (9) 高層化

第4章 地区の空間構造と住宅事例

- (1) 斜面中腹の迷宮部
- (2) 街の中心部
- (3) 高台の平坦部
- (4) 臨海部

第Ⅳ部 サルデーニャ

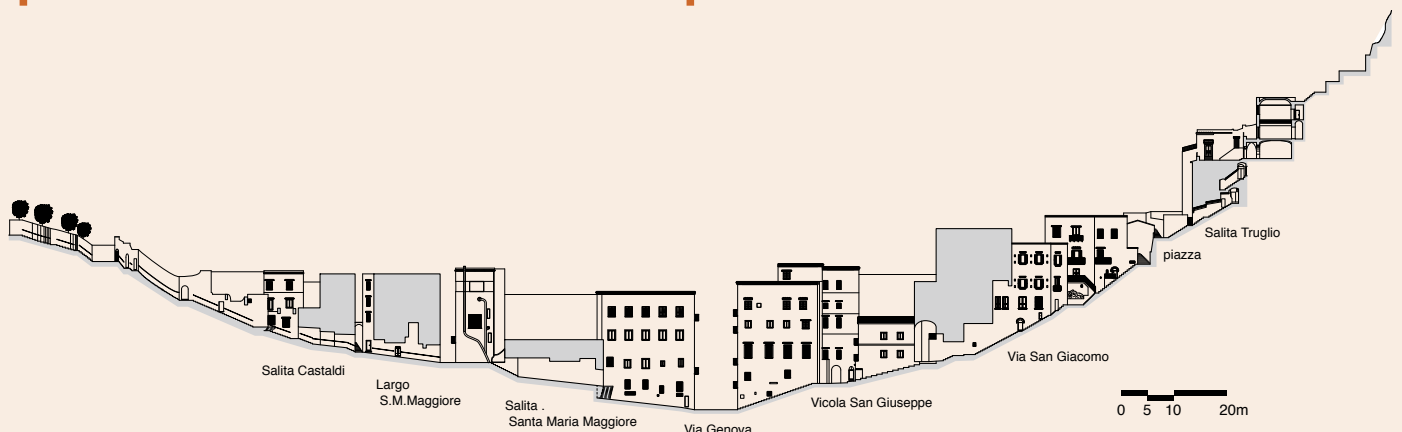
序章 サルデーニャ研究の視点

第1章 南サルデーニャ——農業に生きる平野の町

- (1) 総論——地形・歴史・生活・文化
- (2) 聖なるエレメントに囲まれた町——シリークア
- (3) 街道町として栄えた「偉大なる丘」——セラマンナ
- (4) 平野部と山間部を結ぶ町——ゲアジーラ
- (5) 田園の教会への巡礼——サンタ・バルバラ教会

第2章 中部サルデーニャ——山間部に散在する羊飼いの町

- (1) 総論——地形・歴史・生活・文化
- (2) 聖域ノヴェナリオ——自然に包まれた祈りと祝祭の場
- (3) 4つのノヴェナリオを持つ町——ギラルツァ
- (4) 教会が見守る町——サルレー
- (5) 外階段とバルコニーの町——ソルゴノ
- (6) 山間に発達した羊飼いの迷宮空間——サントウ・ルッスルジウ

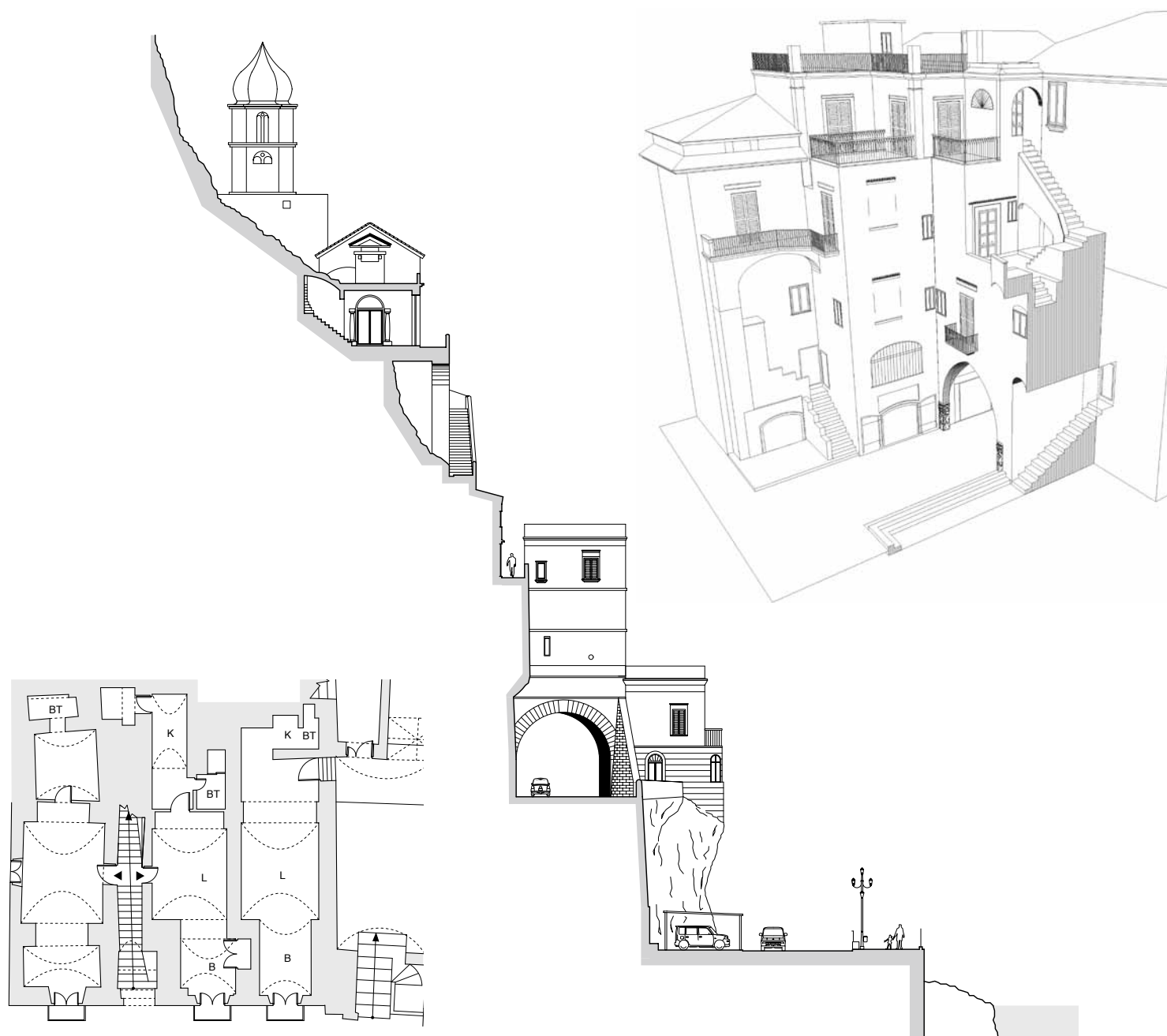


アマルフィ

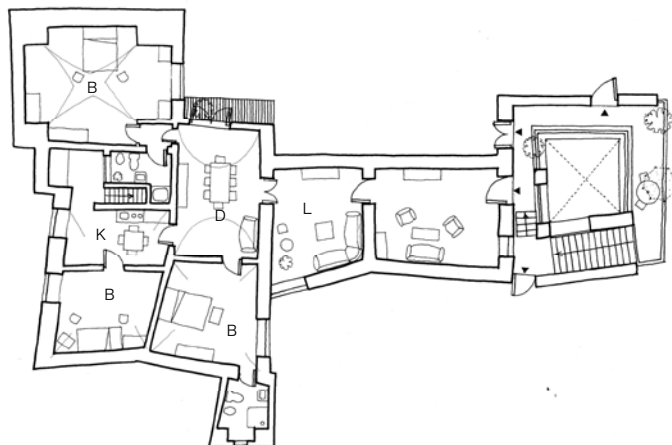
海を見下ろす斜面に発達した中世海洋都市



中世に羅針盤を使った航海術で海洋都市国家として名を馳せたこの街は、海に開く谷間の斜面に、異文化とも混雑した高密度で迫力ある都市空間を築き上げている。

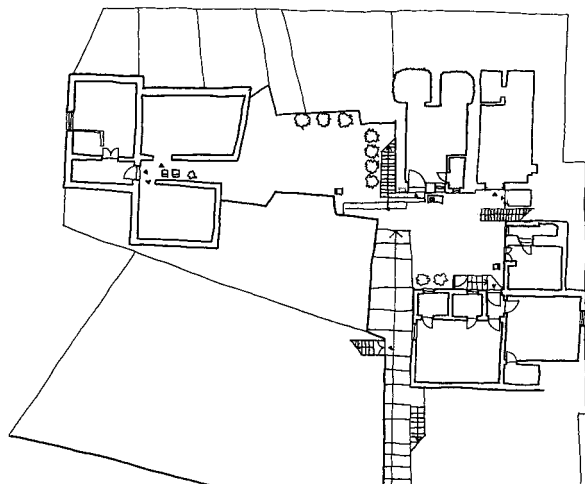


レッチェ バロック建築に彩られた迷宮都市



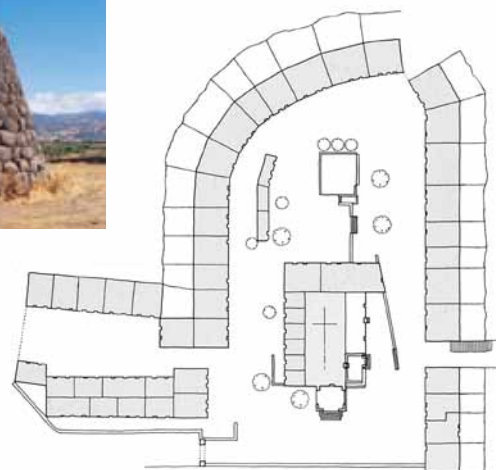
古代に起源をもち、中世には地中海世界独特の複雑な迷宮空間をもったこの街に、バロックの華麗な建築が次々に登場し、街路に独特の演劇的な効果を生んだ。

シヤッカ アラブ文化を基層にもつシチリア都市



シチリアでもアラブの影響が最も強い斜面の街で、袋小路が無数に入り込む複雑な構造をもつ。コミュニティの戸外空間が今も活発に使われているのに驚かされる。

サルデーニャ 巨石文化をひきつぐ牧畜と農耕の町



ヨーロッパの古層をとどめ、聖なる要素が随所に継承されたこの島には、近代文明に侵されない場所の力が感じられる。羊飼いの町の独自の居住形態が興味深い。

地中海地域こそ、都市文化の宝庫

本書は陣内秀信氏と彼の研究室の学生たちによる南イタリアの特徴的な都市のフィールド調査、15年の活動を集大成したものである。すでに、イタリア、スペイン、中国そして日本の都市調査について多くのレポートを刊行している陣内氏の長年にわたる中心テーマ、イタリア都市、その中でもとりわけ南イタリアのサルデーニャ、シャッカ、レッツェ、アマルフィの順で調査を行ってきたものをまとめている。

2004年の暮れもおしつまった頃、本書のゲラが送られてきて拝読した。一言で言うなら、これは大変な作品だ、ということである。全体のボリュームもさることながら、写真、図面の多さに驚いたのである。とりわけ図面は、それ自体がオリジナルな作品だからである。

都市をどのように捉え、研究するかについては様々な立場や方法が考えられるが、陣内氏の都市研究は、強い関心を抱いた現地に真直ぐに身を投じ、フィールド調査を行なうことをすべての出発点に置く。したがって、かつて盛んであった「デザインサーベイ」やルドフスキーの『建築家なしの建築』や、バナキュラリズムなどの系譜に連なる

長尾 重武（武蔵野美術大学学長 建築史・意匠論）

と言えるが、決してそこに留まらない点が重要である。

周知のように陣内氏は1970年代にヴェネツィア建築大学に留学し、トリンカナート女史のもとで建築類型学（Tipologia Edilizia）と都市組織（Tessuto Urbano）論を学び、現状調査から都市形成史を読み解く方法を身につけた。そうした方法的考察が都市の豊かな相貌を解折していく。彼がイタリア、とくに南イタリアに着目しているのは、都市生活の豊かな歴史が都市と住宅に色濃く刻印されているからである。すなわち地中海地域こそ、都市文化の宝庫といえるだろう。

ところで、陣内氏は1960年代末から70年代にかけて、日本とイタリアで建築を学び、熱い変革への希望の時代に青春を生き、その情熱を持続している。

今回の彼の出版物は、これまでの数多の作品にも増して、彼らしいみごとな仕事であると確信し、そのことを共に喜びたいと思う。そして、都市研究者のみならず、都市・環境・建築にたずさわるすべての人々に一読、いや精読をすすめたいと思う。

南イタリア都市フィールド調査の集大成

陣内 秀信（法政大学教授）

古代から高度な都市文明を築いてきた地中海世界では、どこを訪ねても、個性的な風景をもった都市や集落に出会う。この世界には、人が集まって住むための長い歴史的経験が蓄積しており、現代の視点からも学ぶことが多い。

しかし、世界の都市計画の流れから完全に取残されたため、この地域に蓄積された都市づくりの優れた知恵やセンスは、注目されることが少なかった。

法政大学建築学科の我々の研究室では、1989年以来、この埋もれた宝の山に分け入り、イスラーム圏や南イタリア、そしてアンダルシアの諸都市のフィールド調査を続けてきた。

同じ地中海世界とはいえ、気候・風土の違い、宗教や先在する文化の在り方、経済基盤の違いなどによって、都市の構造や住宅の形式、道や共有の外部空間の性格、そして家族やコミュニティの在り方、ライフスタイル等が様々な変化し、フィールド調査の面白さを存分に体験できる。これらのハードとソフトの両面から、あちこちの都市に見られる共通性と違いを比較・分析することにより、地中海世界全体の社会と文化の特質を解き明かそうと考えてきた。

我々は先ず、トルコ、モロッコ、シリア、さらにチュニジアという、地中海を囲むイスラーム文化圏の都市の居住空間について調査した。その経験を生かし、私自身の本来の専門であるイタリアに再び戻り、1989年以来、実測を中心とした現地調査を研究室のグループで実施する作業を続けてきた。

本書は、こうした我々の研究室が取り組んできた15年間にわたる南イタリア都市の居住空間に関するフィールド調査、及びそれに基づく研究の成果を集大成したものである。

これだけ多くの観光客が押し掛けるイタリアにあっても、長靴状の半島のナポリより下の南イタリアに関しては、不思議なことにあまり知られていない。ところが、地中海に突き出たこの南イタリアは、古くから様々な文化が交錯する興味の尽きない地域であり、建築や都市を見る上での宝庫でもあるのである。世界広しといえども、これほどに都市や集落の在り方が多彩で、感動的な風景と出会える場所も珍しい。

南イタリアの都市風景の多様性を生む上で、ここに繰り広げられた歴史のドラマがそのベースになっているのはいうまでもない。古代のフェニキア・カルタゴ、ギリシャ、ローマをはじめ、中世のビザンツ、アラブ、そしてノルマン、さらにはフランスやスペインの支配下で、多様な文化が培われた。

同時にまた、いかにも地中海らしい自然条件、気候風土が、独特の民家や都市・集落の姿をつくり出した。変化に富んだ地形とあいまって、都市や集落は様々な立地の在り方を見せている。

本書に登場する都市に限らず、広く南イタリアの全体に目をやりながら、その都市の居住空間の特徴について論じてみたい。

南イタリア都市の変化に富んだ迫力のある形態は、明らかにその歴史の古さと結びついている。中北部のイタリアよりも、中世の早い時期に都市を形成し、あるいは古代都市を復興したから、骨格となる層が古く、それだけ複雑な都市構造が生まれたといえる。しかも中世以後も、様々な発展を実現したため、都市構造の中に、それだけ歴史の重層性を強く示すことにもなった。（本書 序論より）

南イタリア都市の居住空間

—アマルフィ、レッチェ、シャッカ、サルデーニャ—

編者 陣内 秀信 (じんない ひでのぶ)

サイズ A4 判

頁 数 576 頁

体 裁 上製本・函入り

定 価 47,250 円 (本体 45,000 円 + 税)

ISBN4-8055-0487-0 C3052

2005 年 4 月刊行

編者略歴

陣内 秀信 (じんない ひでのぶ)

1947 年 福岡県生まれ

東京大学大学院工学系研究科修士・工学博士

イタリア政府給費留学生としてヴェネツィア建築大学に留学。

パレルモ大学契約教授 (1986 年)、トレント大学契約教授 (1995 年)

現在 法政大学工学部教授

専門はイタリア建築史・都市史

受賞 サントリー学芸賞、建築史学会賞、地中海学会賞、日本建築学会賞

著書 『ヴェネツィア—都市のコンテクストを読む』 (鹿島出版会)、『都市を読む・イタリア』 (法政大学出版局)、『東京の空間人類学』 (筑摩書房)、『都市と人間』 (岩波書店)、『東京』 (文藝春秋)、『南イタリアへ!』 (講談社)、『歩いてみつけたイタリア都市のバロック感覚』 (小学館)、『水辺から都市を読む—舟運で栄えた港町』 (共編著、法政大学出版局)、『シチリア—<南>の再発見』 (淡交社)、『サルデーニャ—地中海の聖なる島』 (共著、山川出版社)

Tokyo—A spatial Anthropology (University of California Press, Berkeley) , La Sardegna vista dai giapponesi (編著、Edizioni IRIS, Nuoro) ほか



【本書をお薦めする方々】

イタリア・地中海文化の研究者及び興味のある方々

西洋史 (古代～近代) の研究者及び興味のある方々

建築史・住居史・都市史・美術史・人文地理学の

研究者及び研究室

大学図書館・公共図書館

建築設計事務所・建設会社・デザイン事務所

都道府県の都市計画課・建築土木課

まちづくり、町並み保存に係わる機関及び関係者

●本書の特色

- 西ヨーロッパ中心の歴史観から抜け落ちた、地中海文化の宝庫、南イタリアの特徴ある都市を対象としている。
- 古代ローマ、イスラムなど文明の十字路といわれる地中海の多様な文化の積層を住空間の分析から解明する。
- 狭小な敷地条件を巧みに活用して、快適な集住空間を創造する、地中海的住生活の魅力を解明する。
- 地中海周辺地域に固有の、公空間から私空間への巧みな空間の切り替えと構成のシステムを解明する。
- 平面のみならず立体的にも複雑な空間構成を綿密な調査により図面化した労作。
- 全面的に英訳を併記して、完全な国際版となっている。

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104-0031 東京都中央区京橋 2-8-7

電話 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834

お取り扱い